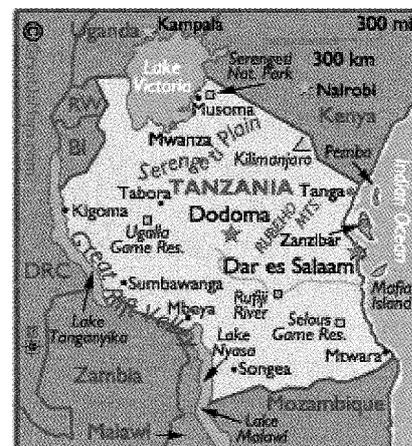
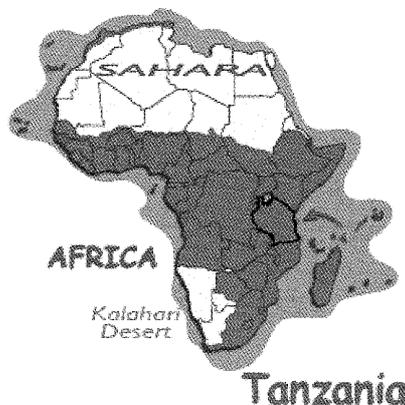


アフリカにおける島嶼海運の現状

前回ではアフリカ大陸内陸部の水上交通の現状について、特に河川交通について現状をご報告いたしました。今回は内陸から少し離れて、珍しい島の海上交通についてご紹介したいと思います。

紹介する島は「ザンジバル」です。正式にはタンザニア連合共和国の一部ですが、1964年にアフリカ大陸のタンガニーカと沿岸の島であるザンジバルが合邦し、タンザニア連合となりました。ザンジバルは自治共和国でタンザニア本土東岸沖合い70kmに位置するザンジバル島(約3300km²=沖縄の約1.5倍)とペンバ島(約1500km²)からなる島嶼国で、人口は約95万人です。

ザンジバルはかつて象牙、奴隷貿易等のインド洋の中継地点として、また丁子の輸出で栄えました。独立後も1970年代まで丁子の輸出が盛んで、小国ながら円借款が供与されるまでとなりました。この時期1979年及び80年にわが国からタンザニア本土とザンジバルを結ぶタンカー及び貨客船が円借款で提供されています。現在は一人当たりGDP200ドル程度で農業と零細漁業を中心とした極貧国ですが、2000年にザンジバルのストーンタウンが世界遺産に登録され、観光地として欧州を中心とした旅客の注目を集めています。



を集めています。

このため、現在ではダルエスサラムから高速貨客船のサービスが始まるなど、近代的な海上輸送が整備されつつありますが、運賃が高価なため、住民の生活物資の輸送、移動は伝統的な木造ダウ船に未だに依存しています。ダウ船は時に自動車も運び、過積載で沈没等の事故も起きているようです。

このような背景から、ザンジバルでは、老朽化した貨客船と海上事故に対応する船舶の整備などが今後の課題となっていますが、本土タンザニアの整備に比べて、輸送インフラの整備は遅れ気味の様です。今後は、これら船舶の代替等の国際

協力が期待されています。

前号 (SRC News72号) でご紹介したアフリカ内陸水運の現状は、平成17、18年度に海洋政策研究財団が競艇交付金による日本財団の助成金により実施した「シンプルシップの設計に関する調査」の一部を海外協力室が担当したものであり、財団のご厚意により紹介いたしました。

説明不足がありましたことをここにお詫びいたします。

(海外協力室 仲條)



ダウ船の船着場



貨客船 (ODAによる供与)